K-ABCアセスメント研究, 23, 1-15, 2021

特別寄稿

カウフマン博士夫妻と私～賢いアセスメントからの学び

石　隈　利　紀（東京成徳大学）

カウフマン博士夫妻が世界の知能アセスメントの第一人者であることは，論を待ちません。そしてカウフマン博士夫妻（以下，カウフマン先生）のK-ABC・KABC-Ⅱを通した日本の知能アセスメントや学校心理学・特別支援教育への貢献の大きさについては，語り過ぎることはないのです。今回の寄稿で，私が偶然カウフマン先生と出会い，スクールサイコロジストになる訓練を受けることができた体験を通して，カウフマン先生による「賢いアセスメント」の哲学と実践について伝えたいと思います。私のアメリカ留学とカウフマン先生との出会いから，話を始めます<写真：カウフマン博士夫妻>。

１．アメリカ留学からカウフマン先生との出会いまで

１）スクールサイコロジストの原点

私は，大学受験で大失敗して挫折をしました（石隈, 2006）。第一希望の大学に入れずに，他の大学に行ったわけです。二年浪人して，第一希望の大学に入れなかったということで，自尊心の大けがをしました。ところが，大学１年生の秋に偶然先輩から家庭教師を紹介していただきました（石隈, 1999）。これが天職でした。子どもが私を待ってくれているんです。そして子どもと２時間ぐらい一緒に過ごすわけですが，１時間が宿題を見たり，中学生であれば英語のレッスンをしたりと学習支援です。残りの１時間は一緒に遊んだり，たくさん話をしたりしました。もちろんお母さんが，コーヒーとケーキを持って来られた時には，遊んでいる時間でもすぐに教科書を開けて勉強の時間にしました。子どもは私とたくさん話をしてくれて，恋愛の相談，進路相談を持ちかけてくれました。モテない私が恋愛相談にのり，キャリアで自信のない私が進路相談にのったわけですね。とても充実した日々でした。家庭教師が，私のスクールサイコロジストの原点になりました。30代になりまして，私は「石隈塾」で食べて行くことを決心しました。英語と数学などの科目を教える塾ですけれども，そのためには一度しっかり，本場アメリカで英語を勉強したいと思い，アメリカ留学を決意しました。

２）アメリカ留学の決意

留学について考え始めた私の背中を押してくれたのが，町の本屋さんで偶然見つけた一冊の本です。それは，当時国際文化教育センター所長だった山田勝先生による『英語を海外で学ぼう』という本（実業之日本社, 1980）です。私はこの本で，「エリートじゃなくてもアメリカに行ける」こと，「アメリカには語学学校があって，そこで英語を基礎から勉強させてくれるし，いろいろアメリカの文化も学べる」ことを知りました。そこで，どこの英語学校に行こうか考えた時に，この本の最後にあったアメリカやイ

ギリスの「英語学校紹介」を見ました。アメリカの英語学校は州のアルファベット順で，アラバマ州から始まって，各州の主な英語学校が紹介されていました。その最初にあった，アラバマ州のギャッズデン短期大学（“Gadsden State Junior College”；　後　に“Gadsden Community College”）にあるアラバマ英語学校（“Alabama Language Institute”）が目につきました。「そうだ，アメリカに行こう，アラバマに行こう」と決心したのです。英語学校についてAからZまで読んで，比較してここが一番，というよりも，アラバマの最初のAで決めました。ただし当時ニューヨークでいろんな事件がありましたのでアラバマの方は治安がいいとか，都会で暮らすよりはアラバマの方は生活費が安いという理由もありました。そして私は1982年３月，アラバマに飛びました。31歳の春でした。そして「ABC」からの留学時代を始めました。私の学校心理学のキャリアのすべてが，アラバマで始まったわけです。

留学当初は英語のレッスンを受けて，１年で日本に戻るつもりでした。ところが20代私は向学心の薪をあまり使ってなかったのでたくさんの薪が残っていました。アメリカで点火した薪が燃えて，勉強はすればするほど面白くなってきたのです。それから４年制大学に行き，最後はアラバマ大学（University of Alabama）の大学院でPh.D.（博士号）を取ることができました（Ishikuma, 1990）。1990年日本に戻ってきたのは，40歳になる秋でした。まさに30代の私の人生は“Journey from ABC to Pd.D.”，と言えます（Ishikuma, 2009）。ちょっと誇らしげで，かっこつけすぎですけど，修行の30代でした。このアメリカ時代に，恩師カウフマン先生との運命の出会いと深い親交，そして豊かな学びがありました。

アラバマ英語学校に通ったのは３ヶ月ぐらいですけど，そのまま残って１年くらい短期大学で勉強しました。英語を学ぶステップから，英語で教養科目を学ぶというステップになりました。アメリカでは，短期大学から４年制の大学に編入するというシステムができていました。ギャッズデン短期大学はアラバマ州の４年制の大学に卒業生を奨学金付きで送る制度があり，私は短期大学の先生方から二つの大学に推薦状を書いていただきました。推薦の理由は，短大の成績と留学生ピアヘルパーグループの活動，そしてコミュニティ活動でした。ギャッデンでは，バプティスト教会主催のHOSTファミリーが留学生を週末に自宅に招待するという事業が行われていました。私も大変お世話になっていたので，HOSTファミリーへの感謝とその制度の意義について教会でスピーチしましたが，それも，推薦状に書いていただきました。そして最終的にはモンテバロー大学（“University of Montevallo”）を選び，幸い３年次編入を許可されました。文理学部や教育学部などからなる小さい大学で，学生数が少なく，学生と先生の比率が非常に良く，先生方の面倒見がとても良い大学でした。

３）K-ABCとの出会い

モンテバロー大学で，私はK-ABCと出会ったのです。運命の出会いは1985年，モンテバロー大学に編入して２年目でした。モンテバロー大学では「心理学」を専攻しました。これも分かれ目ですね。生涯塾で食べていこうと思った私は，編入時の希望の専攻として教育心理学を書きました。しかしながらモンテバロー大学は，教育学部に教育心理学が副専攻としてはあるのですが，主専攻としては文理学部に心理学専攻があるということでしたので，心理学専攻に行くことにしました。おかげで心理学の勉強を楽しく幅広くすることができました。大学の学位は理学士（“Bachelor of Science”）です。生理心理学，実験心理学など，幅広く理科系的なことも学びました。心理学は，文科系と理科系の両方の要素があります。モンテバロー大学で受けた授業の一つが，「心理検査（“Psychological Testing”）という授業でした。その時の教科書が“Assessing Individuals（個人のアセスメント）”という本（Weiner & Stewart, 1984）でした。この本にK-ABCが載っていたのです。K-ABCは

1983年に刊行されました。この本ができたのは1984年です。日本で多くの本が出されています。私もいくつかの本を出しましたし，幸いその中の何冊かは教科書として使っていただくことがあります。でも，出版の前の年に出た新しい検査の情報をしっかり載せるということは，日本では少ないように思います。ましてや私の本ではそうです。この本でK-ABCのことを知って，これは面白いと思いました。言語的な負荷が少なく,文化的な負荷が低く，また検査を受ける子どもが楽しむことができるような検査です。私はK-ABCに魅せられました！私がK-ABCを知ることができたのは，私が授業を受けた1985年に，1984年に出版された本を使い，その本にすでに1983年刊行のK-ABCが載っていたという，最新の情報を載せるアメリカの教科書のおかげです。海外留学を勧める本でアメリカに来て，アメリカの心理学の本で，K-ABCに出会うことができたのです。私は，この心理検査の本との偶然の出会いに感謝をしています。

４）カウフマン先生との出会い

K-ABCの著者であるカウフマン先生に会いたいと，強く思いました。世界的に有名なカウフマン先生のことですから，アラバマという田舎，自分が住んでいてなんですが，そこにはいらっしゃらないだろう，ニューヨークかカリフォルニアだろうと勝手に思っていました。しかしモンテバロー大学で心理検査の授業を担当されたメアリー・ロジャース先生にお聞きすると，「カウフマン先生は，アラバマ大学で教えていらっしゃるよ。私が紹介してあげよう」と言ってくださいました。実はこのロジャーズ先生，モンテバロー大学で心理学を教えながら，博士号の学位とるために，アラバマ大学に通っていらっしゃいました。ですから，アラバマ大学の教授のカウフマン先生のことは，同じ領域，教育心理学ということもあって，よくご存じだったんですね。幸運でした。

そこで私はアラン・カウフマン先生のアポイントメントをとって，アラバマ大学に訪ねました。アラバマ大学は古くて，由緒ある大学で，一流の大学です。大学の広いキャンパスの中を貫く道の側に，教育学研究科（修士課程・博士課程をもつ）があるグレーブスホールがありました。その古い建物の研究室に，アラン・カウフマン先生（以下アラン先生）を訪ねました。ドアの前でカウフマン先生を待っていて，ドキドキしました。当時私は35歳，アラン先生は41歳です。アラン先生は世界的に有名な心理学の教授，私は学部の日本人留学生です。しかしアラン先生は，私を一人のサイコロジストとして尊重してくださり，専門家として対応してくださいました。後に，ウェクスラー先生が20代の若いアラン先生に対して「最初の出会いから，（アラン先生が）これまで受けたことのない程の敬意をもって関わってくださった」(Kaufman, 2009）ことを知り，ウェクスラー先生とアラン先生，アラン先生と私の出会いが，時を超えて線となりつながるようで胸が震えます。

私はアラン先生に「言語や文化の負荷が低いK-ABCは日本語に訳してもすごく価値がある。日本版を開発したい」と無邪気に言いました。アラン先生は，“That’s a good idea!”と言ってくださいました。これも偶然なんですけども1983年にアラン先生の本，“Intelligent Testing with the WISC-R”（Kaufman, 1979）の日本語訳(『WISC-Rによる知能診断』）が日本文化科学社から出版されていました。本書の日本語訳を通して，カウフマン先生は日本の心理学者が優秀であること，日本の出版社がとても良心的で誠実であることを知っていたわけです。私はここでも出版社に助けられるわけです。カウフマン先生は日本大好きで，お寿司も大好きというのは後で知ることになります。カウフマン先生が日本人をリスペクトし，日本が好きだということが，私の人生にとって非常に幸運でした。

私はアラン先生とお会いした後，モンテバロー大学が終わったら，アラバマ大学の大学院に行ってカウフマン先生のところで勉強したいと思うようになりました。１年間でもいいから大学院で学びたいと思うようになりました。そして1985年の秋学期，アラバマ大学の大学院教

育研究科のArea of Behavioral Studies（行動科学領域）に入学しました。本当に幸運なことに，秋学期にアラン先生とネイディーン・カウフマン先生（以下ネイディーン先生）ご夫妻のTT（チーム・ティーチング）の授業があったのです！

“Individual Intelligence Test and Case Report Writing”（「個別式知能検査とケースレポートの書き方」）という授業です（Ishikuma, 2009）。アラン先生やネディーン先生たちが書かれたケースレポートの書き方の本は日本でも上野先生たちを中心に邦訳されており（Lichtenberger, Mather, Kaufman, & Kaufman, 2004），私の愛読書です。カウフマン先生はケースレポートに関する達人です。カウフマン先生のTTの授業を受けたのが，師匠の下での私の修行の始まりになりました。最初はクラスに20数名ぐらいの受講生がいるんですけど，学期の終わりまでその授業で生き延びるというのは大変で，最後は20名に足りない人数でした。1986年大学院２年目と1988年大学院４年目に，私はこの授業で，アラン先生のティーチングアシストをやりました。その経験からも，心理検査の訓練とスクールサイコロジストの養成について学ぶところがたくさんあり，日本での大学の教員生活を支える糧となっています。

２．カウフマン先生の教え１：心理検査の実施

カウフマン先生の教えについて，まずはご夫妻のTTによる授業からのエピソードを紹介します。

１）アラン先生とのロールプレイ

一つ目です，この授業で本当にきつかったのは，アラン先生とのロールプレイです（Ishikuma, 2009）。アラン先生が野球帽をかぶり，ローリーポップキャンデーを舐めながら，とてもタフで検査にのってくれない子ども役をやるんです。大学院生はそれぞれ順番に「アラン君」のテスター役をやるのです。私ももちろんやりました。なかなかラポールをつけるのが難しいアラン君と，「学校生活どうだい，友達はどうだい」など色々な話をするのですね。「野球帽をかぶっているけど野球が好きなのかい，どこのチームのファンかな」，みたいな話をするのですが，なかなかのってくれません。やっとのってくれた時に，「今からやろうとしているのはクイズみたいだし，勉強みたいだし，ゲームみたいだし，難しい問題もやさしい問題もあるけどやってみないかい。アラン君にとってわかりやすい，学びやすい勉強の仕方を一緒に見つけよう。私はアラン君が学校で，少しでも楽しく学べるように応援したいんだ」という話をしましたね。アラン君は，ふん，という感じで聞いていましたけど。厳しかったですね。私たちはロールプレイを通して，検査をうける子どもがどのように感じているか想像すること，検査を通して何をしようとしているかどう子どもに伝えるかについて学びました。もっとも，私はアラン君以上にラポールをつけるのが難しい子どもにはまだ会ったことがありません。

２）検査中に子どもが急に妹のことを話し始めたら検査をやめる？

アラン先生とネイディーン先生が，大学院生に「検査中に子どもが先月亡くした妹のことを話し始めたら検査はどうしますか，続けますか」と問われました（Ishikuma, 2009）。みんな考えましたね。知能検査，個別の検査をやるということは，その子どものIEP（Individualized Education Program：個別の教育計画）の重要なデータの一つになる可能性があるわけです。特別支援を受けるかどうか，どのような指導するかを決める大事な材料になるのです。大学院生たちは色々な答えを出しました。とりあえずこの検査を終わって，そのあとゆっくり聞く，という答えが多かったように思います。アラン先生たちはこう言いました。「もちろん主訴にもよる。でも検査をやめるという選択肢もあるんだよ」と言われました。検査結果を報告することが検査者の目標ではない。検査は子どもを援助する一つの手段に過ぎない。」と言われました。検査をやめるという選択肢を，世界の検査の第一人者，アラン先生とネイディーン先生か

ら聞いたことは，衝撃的な学習体験でした。今でも覚えています。

３）Nadeen先生のCheck Out

検査のトレーニングですから，まず検査方法を徹底的に学ぶんですね。クラスメイト同士で検査をします。とにかく標準化検査ですから，標準化手続き通りにきちんとやる，しかも手引きをパラパラ見ながらでは子どもとのリズムが取れませんから，手引きに書いてあるようなことは頭に叩き込んでおくのです。今度はネイディーン先生が子ども役になって，大学院生がテスターとなって検査をやります。検査のやり方が正しいかどうか，検査結果の記録と採点が正しいかどうか，これをチェックして合格したら外に出て子どもの検査をしていいという許可がおります。これをチェックアウトと言います。

授業の一環としての検査を受ける子どもは，私たちの学びのために応援してくれるわけですから，検査用紙の上に「プラクティス（練習用）」と大きく赤ペンで書いておきます。練習用ですから結果はあてになりませんよと示すのです。ここでやっと検査ができるわけですが，もちろん練習用ですから，援助ニーズの大きい子どもにはできません。困っているから練習相手になって，結果を教えてというのも応じることができません。お友達のお子さんで，練習相手になってくださる，という方を探します。WISC-Rを10件，K-ABCを10件取って，WISC-Rでケースレポートを書き，K-ABCでケースレポートを書き，最後は両方で統合的なケースレポートを書くという練習をしました。ですから日本K-ABCアセスメント学会の年次大会で，K-ABC，K-ABCⅡそれからWISC-Ⅳの両方使っている事例発表のコメント役をさせていただくときに，私は35歳のころネイディーン先生とアラン先生から学んだ授業―標準化手続き通りきちんと検査を実施して，ていねいに結果を解釈してレポートにまとめる―を思い出すのです。

３．カウフマン博士夫妻の教え２：心理検査の活用

１）ケースレポートの真っ赤な添削

アラバマ大学大学院の授業で，ケースレポートはアラン先生が担当でした。５枚から７枚の長さのレポートを提出すると，詳細なコメントが真っ赤になって返ってきました（Ishikuma, 2009）。今でも覚えています。ある子どもにWISC-Rを実施して，検査のプロフィール分析の結果だけから，レポートを書きました。この子の幼児期の家庭環境は恵まれてなかったという仮説を私は立てました。ケースレポートを見たアラン先生が私を呼んで言いました。「Toshi, あなたはこの子どもの幼児期を見たことがあるのか」。もちろん「No」ですね。見たことはありません。「見たことがないことをこんなに自信を持って言えるのか」と言われました。つまり私たちは，検査結果だけでなく，子どもの学級での様子の観察，保護者や教師とからの聞き取り，子どもの指導記録などの情報を統合して，丁寧に仮説を立てなければいけないということを学びました。

もう一つ言われました。「あなたはこのケースレポートを保護者にどう説明するのですか」。一つの検査結果で，幼児期の環境が悪いという仮説は，本当に失礼な話ですよね。私たちはケースレポートの読者である教師や保護者，とくに保護者が，ケースレポートを読んでどのような気持ちになるか考えなくてはならないことを学びました。

私は，その時以来，論文を書くときも，雑誌の原稿や本の原稿を書く時も，読者の顔を思い浮かべます。とくに保護者や学校の先生ですね。私の原稿を読まないかもしれないですが，子どもの顔も思い浮かべます。『学校心理学』っていう本を出したのですが（石隈, 1999），ご自身に学習障害があって，今は学校の先生になり，本当に優れた教育をされている方と文部科学省の会議でご一緒したとき，言っていただいた言葉を忘れません。「石隈さんの本は私も読みましたけど，誰が読んでも，読者が嫌な思いをし

ないよね」と。もちろん過分な褒め言葉ですが，すごくうれしかったですね。カウフマン先生たちの教えの賜物です。

2）検査結果に基づくコンサルテーション

アラン先生とネイディーン先生が，授業の一環として，K-ABCとWISC-Rの検査結果をもとにコンサルテーションの場面を見せてくださいました。授業では，大学院生の一人（母親）のお子さんである，学校生活で苦戦してAくんに事例研究の対象になってもらいました。ネイディーン先生がテスター役で，ネイディーン先生が皆の前でAくんにウェクスラー検査を実施しました。その検査結果に基づいて，アラン先生・ネイディーン先生がコンサルタント役で，母親と小学校の先生（コンサルティ役）にコンサルテーションを実施しました。サイコロジスト，保護者，教師の援助チームでAくんの現在の学校生活における苦戦を整理して，検査結果の解釈に基づき，援助案を検討しました。私たち大学院生は，どきどきして「コンサルテーションの実際」のシーンを見せていただきました。もちろんネイディーン先生は一流のスクールサイコロジスト（実践家）です。一方アラン先生は実践家ではなくて，「知能検査の研究者」です。検査を開発し，検査のより良い解釈の仕方を研究している人です。このお二人が協働でコンサルテーションを行ったのです。お二人は保護者，教師を尊重しながら，子どもの状況についてやりとりして共有して，子どもに優しい眼差しで，子どもがよりよく変化する方法を一緒に探っていきました。それは見事なコンサルテーションのプロセスでした。

カウフマン先生ご夫妻は，子どもに優しく，保護者・教師を尊重し，そして私ども弟子には非常に厳しい方です。さらに，マイノリティには優しいですね。検査を受けることを同意してくださった大学院生は，アフリカンアメリカン，いわゆる黒人の親子でしたけども，カウフマン先生はマイノリティを認め，配慮しリスペクトするという姿勢をいつももっていらっしゃいました。思えば私も日本から来た留学生ですから，私のことを大事にしてくださった理由の一つが私もマイノリティの一人だったからかもしれません。

4．カウフマン博士の教え3：論文の書き方

私は，大学院での修行の途中，1987年〜1988年に日本に帰国しました。日本の子どものK-ABCのデータをとって，アメリカの子どもと知能の比較研究をする博士論文を進めることと，日本版K-ABCの開発の研究をすることが，目的でした。K-ABCの研究は，日本文化科学社のご支援のおかげです。そしてまた1988年にアメリカに戻って1990年まで，博士論文などアメリカの大学院の仕上げと，スクールサイコロジストのインターンを行ったわけです。

スクールサイコロジストのインターンでは，私はカリフォルニア州のサンディエゴに行きました。それは，カウフマンご夫妻がすでにサンディエゴの方に引っ越していらっしゃるから，追っかけたわけですね。私はサンディエゴ州立大学（San Diego State University：SDSU）に，「多文化スクールサイコロジストリーダー養成プログラム」というマイノリティのスクールサイコロジストの教育ができる大学教員を育てるプログラムがあるのを見つけました。そのプログラムに応募し，幸運にも採用されました。中国系の男性のブライアンさんが同期でした。プログラムは，2日半SDSUの講師として勤め，残りの2日半学校で実践のインターンをするというものです。私はSDSUで「学校心理学入門」と「アセスメント」の授業を担当しました。そしてヒスパニック系の子どもたちがたくさんいる小学校で，インターン・スクールサイコロジストとして勤めました。

私は，週5日朝から晩まで，小学校と大学に勤めて，夜と週末が唯一の博士論文の仕上げの時間でした。夜に執筆して，朝職場に行く前にカウフマン先生のご自宅に届けるというスタイルでした。論文の原稿をカウフマン家のメールボックスに入れるのです。カウフマン先生は夜遅くまでお仕事されているので，朝は遅くまで

お休みされています。ここは大事なところです。カウフマン先生を朝早く起こしてはいけないということは，私はちゃんと理解していました。夕方か夜に原稿を受け取って帰るのですが，カウフマン先生とのアポイントメントがあって，ノックしていい時は，中に入って直接ご指導いただきました。

カウフマン先生ご夫妻からは，心理検査のケースレポートや学校心理学の論文の書き方を教えていただきました。いつも言われていたのが，「ケースレポートであれ，論文であれ，読むのは学校の先生や心理職，ソーシャルワーカー，医師，つまり多忙な実践家だから，読みやすくなければいけない」です。とくにレポート全体・各セクション・各パラグラフで，情報を論理的に提供すること，そして文章を明確に論理的につなげるために「転換語（つなぎ言葉）」を適切に活用（Lichtenberger, Mather, Kaufman, & Kaufman, 2004）することについて，学びました。転換語には，まず「それから，次に，○○の後」（時間）があります。そして「その結果，それ故，その理由で」（因果関係），「しかしながら，反対に，一方」（対比），「付け加えると，また，さらに」（追加）があります。私は，これらに「つまり，言い換えれば，まとめて言えば」（同等）を加えてリストを作成して，原稿執筆の参考にしてきました。

もう一つ，論文ではタイトルとアブストラクト（要約）で勝負することをアラン先生から学びました。とくにタイトルを魅力的にすることが，読者を引きつけます。アラン先生，当時クリニカルサイコロジストをしていたカウフマン先生の長女のジェニーさん，私の３人で，WAIS-Rの短縮版の研究をして論文を書きました。その論文のタイトルが“Amazingly short forms of the WAIS-R”です（Kaufman, Ishikuma, & Kaufman-Packer, 1991）。「びっくりするほどのWAIS-R短縮版」でしょうか，これがアカデミックの雑誌に載る論文のタイトルですから面白いですね。アラン先生の論文のタイトルには，魅力的なタイトルがたくさん出てきます。

５．カウフマン夫妻の教え３：Intelligent Testing（賢いアセスメント）

アメリカ留学を通したカウフマン博士夫妻からの学びの柱は，Intelligent Testing（賢いアセスメント）の哲学です（石隈，1999;石隈・家近，2021）。

１）Intelligent testing（賢いアセスメント）とは

アラン先生の代表作“Intelligent Testing with the WISC-R”（Kaufman, 1979）は，知能アセスメントの新しい哲学を示す本と評価されてきました。世界中のスクールサイコロジストやクリニカルサイコロジストが実践の座右の書として使い，多くの大学院で教科書として使われてきました。もちろん本もWISC-RからWISC-Ⅲとシリーズとして発展していきます。この“intelligent testing”という英語はすごく洒落た言い方です。知能検査ですから“intelligence test”ですね。知能測定の道具としてのテストは，結果の使い方でプラスにも差別にもなります。この“Intelligence”を“Intelligent”と言い換え，“test”を“testingと言い換えました。つまり“Testing”は知能のテスト（アセスメント）という行為なんです。そしてその行為を子どもの援助のために行うためには，テスター（検査者）がインテリジェント、つまり賢くならなければならないという意味です。

２）子どものベストを測る

性格検査は，個人の平均的な傾向を図ります。例えば外向性―内向性の検査で，個人の回答から，性格傾向を図ります。一方，知能検査や学力検査は，個人のベストパフォーマンスを測ります。過小評価はさけるようにする必要があります。カウフマン先生は「知能検査は，子どものベストの能力を測ることをめざす。不適切な検査で，子どもの能力の過小評価はしてはいけない」とよく言われていました。知能検査では子どもはまぐれで良い得点をとることはできないので，子どもの能力の過大評価の心配はいりません。子どものベストパフォーマンス，最高の能力を測るのがアセスメントです。その鍵を握るのが，標準化手続きと標準化調査です。

カウフマン先生は，K-ABC開発において，就学前の子ども，マイノリティの子どもなど，どのような子どもにも公平でかつ効果的な検査にすることをめざしました（Kaufman & Kaufman, 1983）。つまりすべての子どもの「ベストの能力」が測れるよう，検査の標準化手続きを工夫したのです。例えば，情報処理尺度の下位検査では，例題の他に子どもが取り組む最初の２問を「ティーチングアイテム」としました。子どもがティーチングアイテムでゼロ点をとったら，検査者は正解を教え説明するのです。ティーチングアイテムは，K-ABCが知能アセスメントにおける最初だったと思います。

次に，知能アセスメントの経験が十分にある標準化テスターによる標準化調査です。カウフマン先生は標準化データを取るテスターをすごくリスペクトしていらっしゃいます。読者の中には，K-ABC，KABC-Ⅱ，WISC-Ⅲ，WISC-IVなどの標準化調査のデータを取るテスターをされた方がいらっしゃると思います。標準化テスターであることを，誇りにしてください。尺度を作ることに参加し，標準化のデータを作り，子どもあるいは大人の最高の能力を測るためのアセスメント開発に参加するということは非常に誇りがある仕事です。ですからテスターの方々の名前を，検査手引きに載せているわけですね。

ただ一つだけ強調したいのは，標準化検査で測るベストの知能は，標準化手続きという実験的な状況において得られた知的な行動のサンプル（標本）に過ぎないということです（Kaufman, 1979）。テストバッテリーによる複数の検査結果や背景情報の活用が，子どもの知能のアセスメントと結果の教育への翻訳には，必須となります。

３）統計的な情報・観察，援助者の勘，専門的知識

カウフマン先生は，知能検査の結果（数値）だけでなく，背景情報（成育歴や学校などでの観察，記録による引き継ぎなど），検査中の行動を含めて，結果を解釈することを強調します（Kaufman, 1979）。さらに教師，保護者，心理職など「援助者の勘」も，これまでの子どもとの関わりから生まれてくるものであり大事にしていらっしゃいます。先ほどの急に妹のことを話し始めた男の子の話を聞くかどうかも，これも援助者の勘かもしれませんね。ただし自分の勘（例えばA君の欠席が続きそうで心配）を裏付ける事実（子どもの援助における以前のできごと，同様のケースの事例など）を言語化することにより初めて，チームでのアセスメントの資料の一部になります。

そして収集した情報を専門的知識に基づいて解釈します。得られた情報をどう意味づけ，教育的な指導・援助案を提案していくかは，援助者および援助チームの専門的知識やスキルにかかっています。だから私たちは，日本K-ABCアセスメント学会をはじめ日本学校心理学会，日本LD学会，日本教育心理学会などの大会や学会誌を通して，子どもの発達支援や知能アセスメントについて，学習を続けているのだと思います。大事なのは専門的知識を常に高めていくという皆さんの努力です。

４）“Kill the prediction!”：予測をくつがえす

カウフマン先生の有名な言葉です。“Kill the prediction!“です。知能検査の結果を活かし，予測をくつがえす，ですね。知能検査の基準関連妥当性は，例えば今年の知能検査の結果と来年の学力検査の結果の相関で検証します。つまり知能検査の予測的な妥当性は，１年後あるいは一定の時期を空けた後の学力検査の得点と相関が高いということで支持されるわけです。検査の妥当性は，心理測定の属性として重要です。しかし一人ひとりの子どもの検査を行って援助する時には，予測が当たってはダメなのです。この子は語彙で苦戦している，１年後に語彙の検査をやったら，予測どおり低かった，これでは検査をやった意味がないわけです。この子は語彙の得点が低い，そして同時処理の得点は継次処理に比べて高いということが分かれば，図表を使ったり絵を使ったりして語彙の指導をすることにより，子どもは１年後には語彙

が伸びているのをめざすのです。つまり，１年後も語彙の得点が低いだろうという予測をくつがえす（Kill the prediction）ことこそ，検査を使うサイコロジストや教師の仕事なのです。Kill the predictionというのは，カウフマン先生の言葉で，今も私の座右の銘です。つまり，誰のため何のための援助かです。私たちは子どもの学校生活の変化の担い手，Change Agentです。担い手はチームですから，私たちは子どもの学習環境に変化を起こすチームの一員です。そして変化を起こす計画はデータ，エビデンスに基づくということです。『長所活用型指導で子どもが変わる』のシリーズ（例：藤田・熊谷・熊上・小林，2016），『日本版KABC－Ⅱによる解釈の進め方と実践事例』（小野・小林・原・東原・星井，2017），『発達障害の理解と支援のためのアセスメント』（前川・梅永・中山，2013），『日本版WISC－Ⅳによる発達障害のアセスメント』（上野・松田・小林・木下, 2015）は，予測をくつがえすための検査活用の手引きと言えます。

６．カウフマンご夫妻の人柄

カウフマン先生の性格や人柄を紹介したいと思います。４つあります。

第一に，パッションの人です。子どもの学校生活を変える，そういう教育案に翻訳できる検査を作りたい，それがK-ABCでした。継次処理とか同時処理という得意な学習スタイルを活用することで，検査結果が援助実践に結びつくことをめざしたのです。

第二に, マイノリティへの配慮がある人です。幼児，マイノリティ，特別の援助ニーズのある子どものベストの能力をきちんと測りたいという強い意志をお持ちです。大変な思いをして検査を受ける子どもたちにとって，検査が楽しいということまでいかなくても，プレッシャーの少ない，受けやすいものにしたい，そしてもちろん結果を子どもたちの教育に活かしたい。というマイノリティを配慮することをいつも大事にされています。

第三に，権威に負けない人です。ビネー検査，ウェクスラー検査という二大横綱といいますか，素晴らしい２つの検査があり，アメリカの心理検査のマーケットでもうこれ以外はないだろうという時に，第３の検査，K-ABCを開発するわけです。K-ABC開発を依頼されたときに30代の若い二人には，チャレンジの精神があったと思います。もちろん若いカウフマン先生に依頼したアメリカンガイダンスサービスという会社の決断もすごいと思いますが，受けたカウフマン先生もすごいですね。権威に負けませんからね。アラン先生は，若い頃から意見をはっきり言う人でした。

第四に，粘り強い，持続性がある人です。お二人は知能に関連する理論について学び続けながら，知能検査の開発・研究を継続して，研究成果を世界中に発信されています。カフマン先生は大脳生理学や神経生理学などの理論，例えばSperryとかLuriaの理論を学び，K-ABCの継次処理・同時処理のモデルに活用されました。そしてKABC-ⅡはCHC理論をベースとしています。それはカウフマン先生たちの「学び続ける」ところから出てきたものです。

７．帰国後の私とカウフマン博士夫妻

1990年，私は日本に帰国し筑波大学に赴任しました。日本への再適応に奮闘する，帰国おじさんの時代が始まります。

１）日本版K-ABCの出版

1993年に丸善メイツから，日本版K-ABCを出すことができました（松原・藤田・前川・石隈，1993）＜写真：松原達哉先生，藤田和弘先生（前列左から), 阿部凱宣さん, 前川久男先生, そして私（後列左から）＞。阿部さんは，丸善メイツで日本版K-ABCの作成に一緒に携わって下さった恩人です。1993年11月にはアラン先生とネイディーン先生がお二人で日本に来て下さいました。上野で日本版K-ABC刊行記念式と出版記念パーティが行われ，日本の心理学や特別支援教育に関係するリーダーが集まってくださいました。その後カウフマン先生と私は，

熱海，静岡，大阪，京都，日光と日本を旅します。日本LD研究会（現日本LD学会）の静岡大会でアラン先生とネイディーン先生が，「LDのアセスメントとK-ABC」について特別講演をされ（Kaufman, Kaufman, & 石隈，1994），大阪のアセスメント研究会でもお話しされました。私がお二人の講演の通訳をしました。あの頃は，私は帰国して３年くらいで，英語も日本語もたぶん同程度の能力でした。今日本語の能力は回復しましたが，英語能力は鈍ってきております。カウフマン先生が日本をたたれる前，日光のホテルでご一緒にお寿司をいただきましたが，日光の寿司が自分の人生で一番だと，今でも言われています。

日本版Ｋ－ＡＢＣ作成チーム

２）日本版WISC-Ⅲの開発への参加

日本版K-ABCが刊行されたしばらく後に，私はWISC-Ⅲの日本版の作成者に誘われます。ドキドキしました。私はカウフマン博士夫妻の弟子です。K-ABCの開発に全力を注いでてきたわけです。つまり，例えがいいかどうかわかりませんけど，日産のメーカーで働いてきた私が，トヨタのメーカーから新しい車を作ることの誘いを喜んで受けていいのかという問いです。アラン先生に国際電話しました。カウフマン博士夫妻は夜遅くまでお仕事されていますので，電話をかける時間の判断は慎重に行いました。メールや携帯を自由に使える時代ではありませんでした。やっと無事にお電話できました。「アラン先生，WISC-Ⅲの日本版開発に誘われているんですけど大丈夫でしょうか」と尋ねたところ，“Of course, Yes”です。「ウェクスラー検査は世界を代表する素晴らしい知能検査です。その作成に関われるのは名誉です」と，きっぱりおっしゃってくださったおかげで，私はWISC-Ⅲの検査の作成に関わることができました（Wechsler，日本版WISC-Ⅲ刊行委員会，1998）。その後ウェクスラー検査の作成グループに入れていただき，とても幸運です。

アラン先生は，デイビッド・ウェクスラー博士とウェクスラー検査を深くリスペクトしています。WISC-Rの標準化の時に，ウェクスラー先生のパートナーとして働きました。WISC-Rは,当時のサイコロジカルコーポレーションで出版していました。今はウェクスラー検査もK-ABCも，ピアソンという会社で出されています。当時サイコロジカルコーポレーションで，WISCの改訂に関して，会社の理事による「退屈な会議」があり，かれらの意見を聞いた後，ウェクスラー先生は「アラン一人に私の自宅に来てもらいます。二人でWISCの改訂版を作り出します」と宣言したのです（Kaufman, 2009），それ以降は，アラン先生はデイビッド・ウェクスラー先生のご自宅を定期的に訪問して，検査はこうしようとか，この下位検査を残そうなどの検討をされました。それから，その後の標準化データを取る時も，アラン先生がリーダーシップをとられたと聞いております。アラン先生は「私のすべての仕事を通して，ウエクスラー先生の影響を見ることができる。ウェクスラー先生のメンターシップ（教え）は知能に関する私自身の考えを形作っている。私も未来の世代の人々のメンターになっていれば，嬉しい」と言っています（Kaufman, 2018, p.210）。

３）Sternberg先生曰く「カウフマンファミリーは知的生産工場」

カウフマン先生の次男ジェームズ君と長女ジェニーさんもサイコロジストなのです。次男のジェームス君ですね，彼は幼い頃から私とよく遊んでいたのでジェームス君と呼ばせていただきましたが，ジェームス・カウフマン先生で

す。創造性の研究で世界的に有名な方です（例: Kaufman & Beghetto, 2009）。ジェームス・カウフマン先生が，日本流で言えば「アラン先生の還暦祝の本」を編集して出しました。“Intelligent Testing : Integrating Psychological Theory and Clinical Practice”（賢いアセスメント：心理学の理論と臨床実践の統合）という本でした。その本では，代表的な知能の学者から世界のいろんな国でK-ABCを標準化した者まで執筆しています。私も「アランカウフマン先生の日本への貢献：K-ABC，賢いアセスメント，学校心理学」と題する章を書かせていただきました（Ishikuma, 2009）。

さてその本の執筆者の一人が，Robert J. Sternberg先生です。知能の理論や恋愛の理論など様々な心理学の研究成果を世界レベルで発表されている一流の先生です。Sternberg 先生は，知能の鼎立理論では，①知的行動を導く情報処理スキル，②過去の経験を利用して新規な情報を処理する能力，③知的活動と外的環境の最適化（対人的な能力など），という3つの側面から知能を考えています（Sternberg, 1985）。実は“The Journal of Special Education”のK-ABCに関する特集号で，Sternberg（2009）先生はK-ABCの新しい課題を解く能力のアセスメントや文化的に公平で障害児も含めた標準化を評価する一方，「知能と習得度」の区別の不適切性や機械的な記憶の測定への依存について批判的でした。

しかし面白い運命なのですが，アラン先生の息子ジェームス君がエール大学大学院に進み，Sternberg 先生の弟子になり共同研究者になったのです（例：Sternberg, Kaufman, & Pretz, 2002）。ジェームス先生が橋渡しになり，Sternberg先生はカウフマン先生ご夫妻のことを知るようになり，カウフマン先生のパッションや思い，研究成果の素晴らしさに直接触れて，K-ABCやカウフマン先生に対する見方を変えていったのではないかという仮説を，私は立てました。そう思うのは，ジェームス先生編集のアラン先生の還暦本で，Sternberg先生は「知能の測定に最も影響を与えた者は誰かと聞かれたら，ほとんどの人はアルフレッド・ビネーを一番，デイヴィッド・ウェクスラーを二番にするだろう。私はアラン・カウフマンが三番にくると思う。そして論文・著書・検査など知的生産においては，アラン・カウフマンは，比較的若いときにビネーとウェクスラーを超えていたと思う」（Sternberg, 2009, p.113）と言っているからです。さらにアラン先生だけではなくて，ネイディーン先生はもちろん，ジェームス先生を含めて，「カウフマンファミリー」は一つの出版産業だと絶賛されていました。ジェームス先生の橋渡しのおかげで，辛口のSternberg先生がカウフマン先生のよき理解者になったのだと，私は考えています。アラン先生も，「K-ABCを最も強く批判していた人の一人であるSternberg先生が，私がこれまでもらったことのない高い賛辞を送ってくれた」（Kaufman, 2918, p.210）と言っておられました。

加えますと，カウフマンファミリーは大学院生や共同研究者も含めて，1980年ころから今日まで40年にわたり，知能や知能アセスメントについての知見を世界に発信してきています。私もカウフマンファミリーに入れていただき，研究の面白さを知ると同時に成果をあげることができて幸運でした（例：アラン先生・アラバマ大学の教授・博士課程同期との共著Kaufman, McLean, Ishikuma, & Moon, 1989；カウフマン先生との共著Kaufman, Ishikuma, Kaufman, 1994；アラン先生・長女との共著Kaufman, Ishikuma, & Kaufman-Packer, 1991）.

4）カウフマン先生の来日

2008年は日本教育心理学会，2011年は日本LD学会で，上野一彦先生のご推薦により，アラン先生が招待され記念講演をされました＜写真：左から私，アラン先生，上野先生＞。どちらもタイトルは「21世紀の賢いアセスメント」でしたが，LD学会の方はLDの子どもの理解と援助に焦点が当てられました。2008年はネイディーン先生とご一緒に招待して頂いていたんですけれども，ネイディーン先生の体調

が悪かったので，アラン先生だけ来られました。2011年は最初からアラン先生だけというご予定でした。それから2008年に来られた時には，KABC-Ⅱ開発に関する勉強会もさせていただき，アラン先生のコンサルテーションを受けるという素晴らしいチャンスがありました。KABC-Ⅱに関するさまざまな意思決定を，アラン先生と膝を交えて，日本版KABC-Ⅱの作成者（藤田和弘先生，青山眞二先生，服部環先生，熊谷恵子先生，小野純平先生と私）と丸善出版社の池田和博社長と一緒に，行うことができました。

アラン先生には直接のコンサルテーションだけでなくメールを通しても，KABC-Ⅱの開発に関して助言をいただきました。「絵の統合」という検査はカウフマンモデルでは同時処理ですが，CHCモデルでは視覚処理ではありません。それは，「絵の統合」が，因子分析の結果，同時処理ではあるが言語的な要素を持っていることが示されたので，CHCモデルでは視覚処理には入らないと分かったからです（日本版KABC-Ⅱ制作委員会, 2013）。

8．最後に：カウフマン博士ご夫妻に敬意をこめて

30代の私の人生は，“Journey from ABC to Pd.D.”の充実した時代でした。英語と心理学の勉強，アセスメント・カウンセリング・コンサルテーションなどスクールサイコロジストとしての訓練，そして学校心理学の研究にと，夢中で過ごしたアメリカ時代でした。留学の決意と留学先の決定，４年制大学への編入と大学院入学…それぞれの岐路における偶然の出会いとそれを支えたアメリカにおける学生支援の制度，まさに幸運のつながりにただ感謝しています。言わば，『実力も運のうち』（Sandel, 2020）です。私のキャリアは運が80％以上占めていることは間違いありません。

１年の予定でアメリカに行きましたので，経済的にはいつもぎりぎりでしたし，節目では家族の支援も受けました。大学時代はモンテバロー大学で編入奨学金をもらったのと，日本語の授業や日本文化の資料の整理（州の最低賃金），教会のベビーシッターなどのアルバイトで乗り越えました。アラバマ大学大学院時代は，カウフマン先生をおかげで，リサーチアシスタント・ティーチングアシストをさせていただき，それで授業料が免除になったうえに給料（stipend）が出てなんとか生活できました。またアメリカには寄付者の名前を冠した奨学金が多くあり，学生を心理的に経済的に支えています。私も学部時代は心理学専攻の学生対象の“Katherine Vickery Scholarship”，大学院時代は教育心理学・学校心理学領域の大学院生対象の“Paul W. Terry Memorial Scholarship”，また留学生対象の“Rotary International Scholarship”に応募しいただくことができて，とても助かりました。私は勉強と研究に打ち込める時間とエネルギーそして将来につながる経験に恵まれ，アメリカ時代は精神的に豊かな時代だったと言えます。振り返れば，留学時代の力の源泉は，健康，20代勉強しなかったので残っていた向学心の薪，そして「わざわざアメリカまで来たという緊張感」と「時間を大切にしなければもったいないという気持ち」です。向学心や時間を大切にする気持ちが持続できたのも，カウフマン先生との出会いをはじめ岐路での幸運な出会いですね。

アラン先生は，Sternberg先生編集の“The Nature of Human Intelligence”の執筆者に招かれ，“Many Pathways, One Destination : IQ Tests, Intelligent Testing, and the Continual Push

for More Equitable Assessment”の章で，ジョージア大学（University of Georgia）でK-ABCの開発を共同で行った博士課程の大学院生（例：Jack Naglieri, Cecil Reynolds）が学校心理学のリーダーになったことをあげ，次の時代に貢献できたと喜んでおられます。さらに続けて「もしネイディーンと私，そしてK-ABCが，すばらしく有能な学生（日本に学校心理学を運んだToshinori Ishikumaも含めて）の将来の成功に，どれだけかでも関わっていたとしたら，光栄です」と言われています（Kaufman, 2018, p.208）。カウフマン先生の文章に自分の名前を見つけて興奮すると同時に，博士課程を修了して30年近く経っても弟子のことを思い，公の場で話題にしてくださるアラン先生にただ頭がさがります。もちろんアラン先生の言葉はいつも褒めすぎですが，アラン先生の弟子思いは変わるところがありません。もちろん「日本の学校心理学」は日本の実践家・研究者が教育風土に合わせて作ってきたものです。

私は恩師であり共同研究者である，カウフマン先生に心から感謝を述べたいと思います。私はカウフマン先生から，「子どもを理解して，子どもの学校生活の変化の担い手」になるという，援助者の重要な役割を学びました（Ishikuma, 2009）。子どもと学校を援助するスクールサイコロジストとして賢いアセスメントを行うことは，厳しい仕事ですが，誇りのある仕事です。カウフマン先生の知能アセスメントに関する私たちへの教えは，K-ABCやKABC-Ⅱの開発，多くの論文や著書を通して，日本の実践家や研究者に伝わり，日本の子どもたちの学校生活を変化させる力を持ち続けてきました。子どもの発達や教育に関わる者として，私たちはカウフマン先生の教えをしっかりと活かし，子どもたちのよい援助者であり続けることができるよう相互に研鑽していきたいと思います。

最後にアラン先生の言葉を紹介します。

知能検査を，そのエリート主義者のルーツからできるだけ遠くに，そして生い立ちにかかわらずすべての子どもを援助するツールとして前進させようとする，これまでの私の努力が，未来のために残せる私自身のレガシー（遺産）になることを願っています（Kaufman, 2018, p.210）。

文献

藤田和弘・青山真二・熊谷恵子編（2000）特殊学級・養護教諭学校用　長所活用型指導で子どもが変わる．図書文化.

藤田和弘監修　熊谷恵子・青山真二編（2000）小学校個別指導用　長所活用型指導で子どもが変わるPart2．図書文化.

藤田和弘監修　熊谷恵子・柘植雅義・三浦光哉・星井純子編（2008）小学校中学年以上・中学校用　長所活用型指導で子どもが変わるPart3．図書文化.

藤田和弘監修　熊谷恵子・高畑芳美・小林玄編（2015）幼稚園・保育園・子ども園用　長所活用型指導で子どもが変わるPart4．図書文化.

藤田和弘監修　熊谷恵子・熊上崇・小林玄編（2016）幼稚園・保育園・子ども園用　長所活用型指導で子どもが変わるPart5．図書文化.

Ishikuma, T.（1990）*A cross-cultural study of Japanese and American children's intelligence from a sequential-simultaneous perspective.* University of Alabama. Ann Arbor, MI: University Microfilms International.

石隈利紀（1999）学校心理学―教師・スクールカウンセラー・保護者による心理教育的援助サービス，誠信書房.

石隈利紀（2006）寅さんとハマちゃんに学ぶ助け方・助けられ方の心理学―やわらかく生きるための6つのレッスン，誠信書房.

Ishikuma, T. (2009) Dr. Alan Kaufman's contribution to Japan: K-ABC, intelligent testing, and school psychology. In J. Kaufman (ed.) *Intelligent testing: Integrating psychological*

theory and clinical practice. New York: Cambridge University Press. 183-190.

石隈利紀・家近早苗(2021)スクールカウンセリングのこれから，創元社.

Kaufman, A. S.(1979) *Intelligent testing with the WISC-R*. New York: John Wiley & Sons.（カウフマン著・中塚善治郎・茂木茂八・田川元康訳　1983「WISC-Rによる知能診断」日本文化科学社）

Kaufman, A. S.(2009) Preface. In Lechtenberger, E.O. & Kaufman, A.S（eds.），*Essentials of WAIS-IV assessment*. Hoboken, NJ. John Wiley & Sons.

Kaufman, A. S.(2018) Many pathways, one destination : IQ Tests, intelligent testing, and the continual push for more equitable assessment" In R.Sternberg（ed.），*The nature of human intelligence*. New York: Cambridge University Press. 197-214.

Kaufman, A.S., Ishikuma,T. & Kaufman, N.L. (1994) A Horn analysis of the factors measured by the WAIS-R, Kaufman Adolescent and Adult Intelligence Test（KAIT），and two new brief cognitive measures for normal adolescents and adults. *Assessment*, 1, 353-366.

Kaufman, A. S., Ishikuma, T., & Kaufman-Packer, J. (1991) Amazingly short forms of the WAIS-R. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 9, 4-15.

Kaufman, A. S. & Kaufman, N. L. (1983) *Kaufman assessment battery for children.* Circle Pines, MN: American Guidance Services.

Kaufman,A.S. & Kaufman, N. L. (2004) *Kaufman assessment battery for children (2nd ed.)*. Circle Pines, MN: American Guidance Services.

Kaufman, A.S., Kaufman, N.L. & 石隈利紀（1994）LDの心理・教育アセスメントとK-ABC―一人ひとりの子どもの得意な情報処理スタイルを生かす教育をめざして―　LD（学習障害）研究と実践, 3, 13-21.

Kaufman, A. S, McLean, J.E., Ishikuma, T., & Moon, S. (1989) Integration of the literature on the intelligence of Japanese children and analysis of the data from a sequential and simultaneous model. *School Psychology International,* 10, 173-183.

Kaufman, J. C. & Beghetto, R. A.（2009）Beyond Big and Little: The Four C Model of Creativity. *Review of General Psychology*, 13, 1-12.

Lichtenberger, E. O., Mather, N., Kaufman, N. L., & Kaufman, A. S. (2004) *Essentials of assessment report writing.* John Wiley & Sons（上野一彦・染木史緒（監訳）(2008)『エッセンシャルズ:心理アセスメントレポートの書き方』日本文化科学社）

前川久男・梅永雄二・中山健編（2013）発達障害の理解と支援のためのアセスメント，日本文化科学社.

松原達哉・藤田和弘・前川久男・石隈利紀編著（1993）K-ABC心理・教育アセスメントバッテリー　丸善メイツ

日本版KABC-Ⅱ制作委員会（2013）日本版KABC-Ⅱマニュアル　丸善

小野純平・小林玄・原伸生・東原文子・星井純子（2017）日本版KABC-Ⅱによる解釈の進め方と実践事例，丸善出版.

Sandel, M.J. (2020) *The tyranny of merit: What's become of the common good?* Farrar, Straus and Giroux（鬼沢忍訳（2021）「実力も運のうちー能力主義は正義か？」早川書房.

Sternberg,R.J. (1984) Toward a triarchic theory of human intelligence. *Behavioral and Brain Sciences*,3, 269-287.

Sternberg,R.J. (1994) The Kaufman Assessment Battery for Children: An information-processing analysis and critique. *The Journal of Special Education*, 18,269-279.

Sternberg,R.J. (2009) Theory of successful intelligence as a basis for new forms of ability testing at the high school, college, and

graduate school levels. In J. Kaufman (ed.) *Intelligent testing: Integrating psychological theory and clinical practice*. New York: Cambridge University Press. 113-147.

Sternberg, R. J., Kaufman, J. C., & Pretz, J. E. (2002) *The creativity conundrum*. Philadelphia: Psychology Press

上野一彦・松田修・小林玄・木下智子 (2015) 日本版WISC-IVによる発達障害のアセスメント－代表的な指標パターンの解釈と事例紹介．日本文化科学社.

Wechsler, D.著，日本版WISC-Ⅲ刊行委員会訳編著 (1998) 日本版WISC-Ⅲ知能検査法．日本文化科学社.

Weiner, E.A. & Stewart, B.J. (1984) *Assessing individuals: Psychological and educational tests and measurements*. Boston, Mass.: Little, Brown, and Company.

山田勝 (1980) 英語を海外で学ぼう．実業之日本社.

※2020年，日本K-ABCアセスメント学会では，大会や研修会が中止になるなか，会員向けに，オンラインレクチャーを始めました。本稿は，オンラインレクチャーを基に作成されたものです。